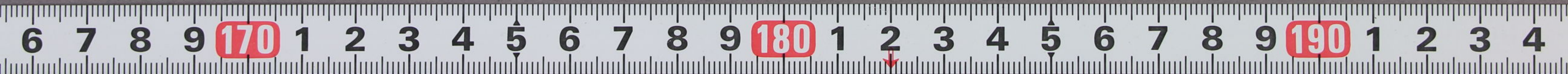


寄
解
改正月令博物笈
二秋部
四

十二





三秋之部目録

三秋の分へ△印あるは前より俳の季の用物也

時令

此部の時令小かくつたこと出ま
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

△秋風

秋

△秋雨

秋

△秋霞

秋

秋雲

秋

△秋虹

秋

△露

秋

△袖のつる

秋

△霧

秋

△川きり

秋

△下道

秋

△秋日

秋

△月

秋

△まきり月

秋

△掛

秋

△月さや

秋

△都

秋

△月の霜

秋

△心

秋

△月の水

秋

△胸

秋

△不見月

秋

△新月

秋

△三日月

秋

△弦月

秋

△くもり月

秋

△望月

秋

△上弦

秋

△立待月

秋



秋 目録

△居待月 △十八夜月 秋十五丁
△伏待月 △寝待月 秋十四丁

△更待月 △九月月 秋十五丁
△廿五夜月 △亥夜月 秋十四丁

△有明月 秋十四丁
△待月 秋十四丁

△残月 秋十五丁
△照月次 秋十五丁

△星月夜 秋十五丁
△身入 秋十五丁

△秋の聲 秋十五丁
△秋野 秋十六丁

△秋山 秋十六丁
△秋水 秋十七丁

△秋夕 秋十五丁
△秋夜 秋十五丁

△混雜 此部ふり日令時令草木を
小かりざり品と出す

△龍田姫 秋十五丁
△秋宮 秋十五丁

△律の調 秋十五丁
△千秋樂 秋十六丁

△鶴衣 秋十六丁
△田の庵 秋十六丁

△小田守 秋十六丁
△案山子 △鹿鷲 △瀝水 △鳴子

△鳥おじ △漆水 △確 △鳴子
△引板 △三郎 △焼鳥 秋十五丁

草木

此部ふり三秋ふり
草木をいふ

△柎 △柎 △秋 秋十六丁

△薄 △志のそと △一と薄 秋十六丁

△糸薄 秋十六丁
△葛葉 △秋 △秋 秋十六丁

△忍草 秋十六丁
△蔦 秋十六丁

△芭蕉 秋十六丁
△景天草 秋十六丁

△草花 △千種の花 秋十六丁
△百州の花 秋十六丁

△雁来紅 秋十六丁
△白茅 △秋 △秋 秋十六丁

△萱刈 △萱 △秋 △秋 秋十六丁
△角觥草 秋十六丁

△大子草 秋十六丁
△秋殿 △秋 △秋 秋十六丁

△花壇 △花島 秋十六丁
△鬼灯 秋十六丁

△新番椒 秋十六丁
△若烟草 秋十六丁

△布瓜 秋十六丁
△薑 △秋 △秋 秋十六丁

△牛房引 秋十六丁
△芋 秋十六丁

△頭の芋

秋

△薯蕷

秋

△零餘子

秋

△耳諸

秋

△泉

秋

△栲

秋

△さうし柳 △ほろがさ

△梨子

秋

△木色 △山梨

秋

△秋田

秋

△稲船 △稲草の花

秋

△落穂

秋

△稲子

秋

△稲蓮

秋

△喬杆

秋

△稲扱

秋

△新米 △青米

秋

△綿取

秋

△桃吹

秋

秋 生類

この部は三秋小の生る生るの類

△鹿

秋

△鹿 △鹿 △鹿

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

△鴉

秋

△鴉 △鴉

秋

三秋目錄終

○五節々祝譯

一五節々々々祝々事々々々々

陽月々々々々々々々々々々

成の道いして陰々々々々

謂々々陽の数一三五七九

の奇数々々陰の数二四六

八十の偶教あり故小陽と扶
 け陰と柳あり術小陽月陽日
 小食らる物と云陽物を食
 て陽と旺し陽を扶く先春
 餅草餅粽索餅栗等の物
 と供御小献るこしあり故小
 節供くつ入江家次第小委く
 見えたり正月の七日とりのて
 節供の初老と守清少納言
 の枕草子にも粥の節供黍
 りくつるも此事ありとせ
 中々正五九月と三長月や
 定らるるに仁明帝の御宇
 承和三年の詔とや

秋之部

三秋のちと云ふ所のもの
 秋の風は時候よりけり
 秋の風は時候よりけり

時令

秋の風は時候よりけり
 秋の風は時候よりけり

秋風

秋の風は時候よりけり
 秋の風は時候よりけり

秋後拾遺

秋の風は時候よりけり
 秋の風は時候よりけり

拾遺愚

秋の風は時候よりけり
 秋の風は時候よりけり

新撰撰

秋の風は時候よりけり
 秋の風は時候よりけり

詞

秋の風は時候よりけり
 秋の風は時候よりけり

秋の風は時候よりけり
 秋の風は時候よりけり

① 連 秋風のきつさも似ぬ秋の 紹巴
 ② 柳 独風や雀の竹の葉にそわれ 園女
 ③ 狂 夕ざれば門のやまをくわきて 自曲
 ④ 狂 夕ざれば門のやまをくわきて 自曲

詩 秋風五字對句

山樹含斜日 晚風連殺氣
ヤミノシユモクニ ヲフカセガフケハモノ
 ユフヒノカダブミセ スゴヒケシキニナリ

池風澄早涼 新月照邊秋
イケウカセガハヤウ ミカツキガヘンドノ
 スミシイケシキヲミセル フキゲレキヲミセル

詩 秋風七字對句

秋風江上濤無際 白雲飛
シウフウ コウ シウナミ オレタガ
 ハクウン ト

暮雨舟中酒一樽 風滿樓
ボウ レウ チウ サケイツン
 カゼ ミツロウニ

琪樹西風枕簟秋 懷同遊
キジュ セイフウ チンテンノアキ
 ヲモイジユホ

詩 秋風詞

楚雲湘水懷同遊
ソウウン シウスイ ヲモイジユホ
 シラウモガ ハヤウユク

少年今白頭 高歌一
セウネン イマハクダウ キノフツカイトキカツイケラ
 ノヒラガ音トナツタトオモフ

曲掩明鏡 昨日
キョク オクメイキョウ キバシレニ
 ナドヲツクテ鏡ヲミル

秋雨 何れをたつものもいれど
アキメ
 雲雨とどろれどいづれのやう

秋 夫本 ぬ家
秋風乃とそいへくつら村を
 ぬくまなりて月うらうら

千首 秋雨打窓 師兼
千首 秋雨打窓 師兼

詞 秋のゆくゆく 桂のさゆ
秋のゆくゆく 桂のさゆ

連 秋のゆくゆく 桂のさゆ
秋のゆくゆく 桂のさゆ

俳 秋の雨 朔蘭
秋の雨 朔蘭

狂 亦く毎とくや下ぞらの村雨の
さかも稚田もいそげしくなる常盤

詩 五字對句 同上

晴山踈雨後 白雲當嶺雨
ハクウンア亮ミ手ニ
シラクモカムカフノミ子エ
カイツテアヌガフル

秋樹断雲中 黄葉遠階風
クウツエダンノクンチ
クウエフマ亮カイヨカ
キバンタホノハガチツテ庭
ノミダンヲ亮ト風カフク

九曲暮雲連雁宕 秋風飛
キキヲボウウンツチガトウニ
イクエモ立コメタ日クレノ雲カ
タカクフク

片帆秋雨落錢塘 帶雨秋
ハシノレウウウツ セントウニ
ヒツツホカケ舟ガ秋雨ノフル日
秋ケシキカ深ヒ

秋霞 朝毎又東のうら始くと
あきのうらと 朝毎又東のうら始くと
をじしくやけと湯気

のそんちうらうらついで日初はし
朝天雲乃やけら紙船やけと

つふ二三日のうらと雨よなる。夕
やけ西あうて山まわれづきて

日初より霞のや春 秋工朝の
の十六丁めよ妻一 秋虫 朝の

西より西三日の内と雨ふる。香の
虹いあらあつて暁天よりけ

。物々とも又虹のまるととと
とらうくきてはち風うたり

秋雲 向雲東南のうらより
あしがち風よけらこの風かへせ

とらうら。西方より東へけり
西南西小とも又日初より。雲

天阿とらうげは雨雨あるなり
秋さむいまだあつてさるも今うらの

秋のととや雲とをうらん基細
露 白霧 △うらは白△露の

△△△△△△△△△△△△△△△△
玉△△△△△△△△△△△△△△△△

陰 陰 玉露 玉潤 白露
露のまけは秋のふ又九月時令

のふに雲しくまらぬなり白霧
の物よをたさるるまらぬなり白霧

葉の上と神のうらみとふとれたるを
 露のまははまの足とくくを神の
 露ハ神をたれををも神のまあり
 さらともえつとあれたる病のをた
 るしとくものくまありたるとも
 ち海よりゆりゆりまばかり
 〇海濱も海風のころりころあ
 ぶりとくくことあり玉を病玉
 潤ともまたまのおくたかから
 又見とくくつとあり

秋 建仁教合

寂蓮

晴雨つらゆへ日のつらう 神さまで
 ち風さむきあくのむら病

千五百番秋合

通具

去ぐしけりけりこれ村雲やもや
 入りりいづくくこれるのほ

真應百首

浅茅露

為家

菊はけりやとれとつる歩らふの
 ちどあつてくは色のま玉

夫木

名石露

僧正彩去

露城のなかのくは小萩をさりれ
 ちのほる病るやち月うあ

後拾遺

朝露

範永

さいし来つる神は病又秋ぬまぬ
 移りやーぬるをさち花とり

千首

菊病

為尹

秋のまははまの足とくくを神の
 一れとくくく秋のまははま

家集

露秋秋玉

信補

秋のまははまの足とくくを神の
 何れハまきゆり病のま玉

詞

結ぶ。ま。おまき。ふらき。ふら。

月の中。ころる。萩。ま。つ。あ。く。の。ま

病のまははまの足とくくを神の
 の下病。菊。病。菊。の上。病。は。

中れま。菊。病。菊。の下。病。ま。病。

のま。小。病。の。ま。ま。ま。ま。ま。

黄。病。病。病。病。病。病。病。病。

く。病。病。病。病。病。病。病。病。

秋の良き時なり 露の清き時なり 霜の降りし時なり 萩の花の咲く時なり 菊の盛りたる時なり 月夜の静けさなり 夕陽の紅さなり 朝露の白さなり 雲の白さなり 雁の南を飛ぶ時なり 蟹の肥えたる時なり 酒の旨き時なり 月夜の静けさなり 夕陽の紅さなり 朝露の白さなり 雲の白さなり 雁の南を飛ぶ時なり 蟹の肥えたる時なり 酒の旨き時なり

詩 露七字對句 詩礎

直望明河臨象闕 露未乾

誰沾露捧金盤 雨露清

光泛月華明徹曙 玉露秋

氣晴天宇暗生寒 白露偏

桂香多露裏 夕陽飄白露

石響細泉廻 樹影拂青苔

露露故事 陰陽氣勝 陽氣勝 散

凝露雪ナリ 霜ト成ルナリ

テ雨トナリ 露トナル 陰氣勝

凝露雪ナリ 霜ト成ルナリ

テ雨トナリ 露トナル 陰氣勝

凝露雪ナリ 霜ト成ルナリ

テ雨トナリ 露トナル 陰氣勝

凝露雪ナリ 霜ト成ルナリ

テ雨トナリ 露トナル 陰氣勝

凝露雪ナリ 霜ト成ルナリ

金莖 漢武帝承露盤トテ器

銅ニテ高サ二十丈ニ作り建

章宮ニテ一夜天ノ甘露ヲ兼テ玉

屑ニ和シテ飲タリトアリ

霧 △きりの海△きりの香△霧

△きりの下る△川きり△きり雨

△きり三人。△きり霧之海ハ雲也

△きりりり地獄せざる所雲と云

後一して無せざるを霧とて人皆

霧の雲とて霧とて秋のころ

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

霧とて霧とて霧とて霧とて霧とて

か... 出。ほき人... 出。...

ら男... 出。...

常娥 張衡靈憲 丹桂... 酉陽雜俎

素娥 玄兎 因樹屋法 王金心

蟾除 三任通義 全波 若漢書 五九 蘇詩

金桂 同國多覽 全環 白石金 銀盤

水鏡 謝莊月賦 水輪 東坡詩集

水氣 淮南子 望舒 淮南子 夜元 天問證

月を... 望舒...

霜人... 望舒...

秋... 望舒...

望舒... 望舒...

連儼... 望舒...

七月... 望舒...

中秋... 望舒...

望舒... 望舒...

八月... 望舒...

望舒... 望舒...

の上... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

望舒... 望舒...

露やや月の桂の花やちる 昌叱

学客は月のかつた吐あり 許六

婦娥 昇ト云フ人不老不死ノク
スリヲ西王母ニ請ヒ得タ

九二拜カ妻ノ婦娥ヌス三服シテ

月ノ中ニ奔リノボリタリト云フ

故事ナリ 事支類聚ニ出ヨツ

テ月ノ異名ヲ婦娥ト云ヘリ

月都 死世絶ニ日月天の宮殿被
授ニ云ハシクモクニ十九

由旬ありに面乃垣牆ハ七宝ニ
はらまじりと云云これ月のまことの

故み乃 玉石あり

秋 夫木 為家

玉竹の光りの輝く月夜は
心の蓮より月をともす也

月もふのふさふさぬ都々巴綾

月鼠 警喻經ニ日虎ニ逐レタル
入野中ノ井戸ニ落入ニト

シテ草ニトリツキタルニ黒キ鼠ト白
キ鼠ト有テカノ草ノ根ヲ齧カノ黒

キ鼠ハ月之白キ鼠ハ日之コレ月日ノ
早クタツタトヘアリ月ノ鼠ト云事

此經説ヨリ起リ

秋 我己のひまけ根とむい鼠と
るんハ月乃らうちきま 俊成

秋 月鼠ハカクハ鼠ハ惟然

月の霜 月の地は照ガキ
又 何よりをいへ

秋 秋さむいさけおひひきて
月とさう霜と見えたり 富仲

秋 ちんちんうさぎの月のお夜叉本枝
狂 美蓮の髪は膝もりのぞうり

月乃ひうらひまつちるる霜 令波

詩 李白 牀前看月光 ユカニニ自
ノ光ヲミレバ

疑是地上霜 アーリニサニニニ地ニ
モノタイテカトウタカフ

舉頭望山月 フリアラムイテレバ

山ノハノ月ジヤ

低頭思故郷 サレウムイテハ故郷
ノコトラオモヒ出ス

月の雪 月の光白く雪の如く
雪の如く月を照らす如く

月乃霜と日乃雪なり

秋雪なりかたしは物と九月なり
秋の月乃霜と日乃雪なり

如泉 如くは月を照らす如く

狂 狂なる月乃雪の如く
狂なる月乃雪の如く

月乃氷 月乃氷なり
月乃氷なり

秋 秋の月乃氷なり
秋の月乃氷なり

真如月 真如月なり
真如月なり

心月 心月なり
心月なり

胸月 胸月なり
胸月なり

不見月 不見月なり
不見月なり

詩 七字對句 詩 七字對句

四野霧凝空寂寞 空對酒
四野霧凝空寂寞 空對酒

九霄雲鎖絶光輝 懶登樓
九霄雲鎖絶光輝 懶登樓

月乃詩歌連俶 月乃詩歌連俶

月乃詩歌連俶 月乃詩歌連俶

月乃詩歌連俶 月乃詩歌連俶

月乃詩歌連俶 月乃詩歌連俶

月乃詩歌連俶 月乃詩歌連俶

月乃詩歌連俶 月乃詩歌連俶

月乃詩歌連俶 月乃詩歌連俶

月乃詩歌連俶 月乃詩歌連俶

秋 金葉

皇后宮 肥後

月を思ふかりふらふれまきさるが
ゆくもあはれあけがさるるゆ

千載

実家

秋乃秋のこゆとほくはらふらそ
かのうらえゆるゆ月よる

續後撰

和家

うかひれいよふ秋もあはれ
月うらむしのゆげやそらうん

續古今

和家

あはれき小秋風さし 天の系
やうらゆる月の夜ぞうけふゆ

續拾遺

衣笠

かきぎのさきさう樹も白き
そら霜いそぐ秋の月うら

玉葉

西行

人もあはれうらたれとあはれ
とむしん月のうげとこそそ

續千載

後成

あづのてもあはれ月の夜ぞら
よりのたかきは乃露のうらとを

新吉 回家見月

弟天宮 吉

月はあはれ山田の夜あはれ月や
かろくもむとふ水をうららん

月信 池上見月

後系極

池よとむせうをよとせひかり
本此下うらきあは乃月うら

調 月つまゆ。月のよま。月のとが。

月結あ。月のさう。月の舟。秋とえ

てら。月さけのあ。月のうら。月の

秋。月あはれ。月よ。月のあ。月の

月の入。月の月の秋。月のさ。月の

秋。月信。月のさ。月のさ。月のさ。

月白き。かくる。月。天て。月の夜

け。月の。ゆ。つ。夜。と。の。ゆ。と。り

。月の。ゆ。と。り。ゆ。と。り。月。三。日。の。月

。出。る。月。入。る。月。入。る。月。入。る。月。入。る

ゆ。月。入。る。月。入。る。月。入。る。月。入。る

乃。月。入。る。月。入。る。月。入。る。月。入。る

月。入。る。月。入。る。月。入。る。月。入。る

月。入。る。月。入。る。月。入。る。月。入。る

月。入。る。月。入。る。月。入。る。月。入。る

運 宿霧の世にがれ出る月の朱碩
 ふうさとい月を足し世の初のを朱碩
 月やまを産まうくの秋の水朱碩
 意を足す月のすらなる世の朱碩
 傲 きらぐひよんせせは物よ水の月 去来
 撥つらもころびやう草乃月 芭蕉
 月の意をとり持ちたる本もえん 素堂
 何れとて世を知らぬ月夜を 龍雪
 月夜を知らぬ世を月夜を 去考
 狂 月を世しを月を月を月を月を
 月を月を月を月を月を月を月を
 何れとて世を知らぬ月夜を 龍雪
 月夜を知らぬ世を月夜を 去考
 何んぞ入る月乃夜も多信海

詩月詞

東坡

一 更山吐月 月ガ出ル
 玉鏡 卧微瀾 玉ノカミガサナニ
 正似西湖上湧金門外看
 テウド西湖ノ上ノユキモント云トコロノ
 アタリテ見タヤウナケンキジヤ

月ノ詞

李白

小時不識月 ナイサイトキ月ト
 呼為白王盤 月ヲ白タニノタ
 又疑瑤臺鏡飛上青雲端
 テタ至ノウテナカニカニ青雲アタリヘ
 トビアカツタノカトヲモフタ

待月五字對句

同上

玉軫鳴風久 自是登樓早
 金輪出霧暉 非于出海遲
 コカ子ノワカ霧ヲモ 月ノ海カフ出ヤウ
 出ルノガランイ カラソイニエテハナイ

新月

新月 破環 抱林子
 玉 盧全詩集 一 古詩

新月もつら連儂へ八月十五夜と
 新月の月をのよの釋徳建が詩
 新月沈鉤細と他より新月
 かのやまの月とつらなる天
 か待のどく三夜中新月のそ

と他は月三ふ夜まで各月のみ
多論之りしと秋月の満月とより

拙にも月不々々て方々於たり
詩 新月 鐵々 抹黛眉 此は三月月乃

三月月 拙 文選 異名 賦 皇
明名 若月 若月 若月 若月 出

〇月三月よりて魄とより魄とより
〇若の月大なるに二月の月乃

ふある若の月小なるに三月の月乃
ちる哉と月始とよりと 三々合出

歌 本の同り 垣根より此三月月乃
うげしりたるいふがの月 名家

ま本 あきりし人の月も梅のよそと
さうぞをきき三月月のうげ 名家

俳 同ころに雅が捨てて三月月交考
人家のきりりやとや三月の月交圃

三月月や月をきみあれ水の月 芭蕉
若の月あつてもいづる三月の月蓮二

狂 拋の所免いさくともけきや
眉さぶくこ三月の月うけ 貞佐

弦月 二弦△下弦
△のりり月△くくり月

撰 後 稷 古 宗 府 輪 長 社 詩 暈 缺
淮南子 如 朝 文 選 恒 月 詩 狂 圓 缺

三月月。上弦とつらひ毎月七八日と
なり下弦とつらひ廿三日以後 歌名白

弦は月形をなすは月形
弓と張さうしと在より張り

歌 月を待弓張るもつらひ
さうさう入るとありあり 順

狂 夜とありかこ月乃くくハ
竹の影とくく人よこそあれ 三未

月 詩 歌 月は月乃は月乃
三月月 十八日乃月乃月乃 蓮 蓮

八月十八日乃月乃
八月十八日乃月乃

不知夜月 既 早 曉
八 秋。 輪 減。 先 虧

十六日乃月乃 秋の十六日乃
十六日乃月乃

秋 新六帖

ぬち

秋風正吹、夕雲をいて中、で
まのわで、さういさうい乃月

詞 きののあき、はるきり、いさうい
さういさうい、山のていこひのあり

俳 多うのや月のいさうい、木の山、秋風
さういさうい、さういさうい

立待月

△十七秋月、さういさうい
既室、飽書、待出、今宵

説 須臾の向をまつ、秋、さうい
秋といふ、程かるふさう、秋のいさ

連 傲、八月とも、又い三秋、さうい
秋、八月十七日の秋、さうい

秋 新六帖

夜笠、内府

我門、さうい、さうい、さうい、秋、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

俳 多信、さうい、さうい、さうい、山川
さうい、さうい、さうい、さうい

居待月

△十八秋月、待、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

俳 親、さうい、さうい、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

狂 宵のさうい、さうい、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

伏待月

△秋待月、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

秋 拾玉、装、秋、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

俳 毒のさうい、さうい、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

俳 伏待、さうい、さうい、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

更待月

△廿日、さうい、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

俳 満、さうい、さうい、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

俳 秋、さうい、さうい、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

連 名も、さうい、さうい、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

二十三秋乃月

△廿三秋、さうい、さうい
さうい、さうい、さうい、さうい

蒼海の縁白うれば月れのつらと
夕を倍の勢至がさるゝついで拜
むきり正又九月三ヶ月の月形
どのいゝ秋の月と拜せり

有明月 十月秋の後の月之月
あつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋の月のつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

連 秋の月のつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

狂 人の世はひまの影のつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

待月 詩奇ともよにまよふも
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

秋 山のとけまよふもあつたてのつとなくともあつたより
あつたてのつとなくともあつたより

の年とらふ年戸の何々ありとらふ
夕影篇藤倉吉二モクニ

秋 涇川百首

常陸

我ひとりかまらうらなせえゆけが
わ一月夜こそうましくかりけれ

身入

秋風ハ人のあうらにまご
こむちんあかあうりのん

秋

通志

園のやうのむせうぬさつ風の
あふまむかづれば秋のまふり

連

あふまむかづれば秋のまふり

秋の聲

あふまむかづれば秋のまふり

柳

あふまむかづれば秋のまふり

詩

古文秋聲賦 歐陽永叔

方夜讀書聞有聲自西南來
若 永叔カ夜書ヲヨシテ井タルニトコトモナニ
コエカアリテ西南ヨリ來タル

悚然而聽之曰 ソツトシテコレヲキイ
テ云フコトニハ

異哉初浙瀝以蕭颯 カハツタ
コトジヤ

忽奔騰而泅泮 水ノナカルヲトカス
レテ

如波濤夜驚風雨驟至 下略

秋

秋乃物のけーきと云

秋 秋乃野の味と云と云

詞 秋乃野の味と云と云

松乃を萩。そとてうへ。うら

ら。藤。紅葉。花と云。花を

下。こ。晴。う。く。花。あ。り。人。古。柳。
船。旁。藤。の。ひ。ま。な。げ。白。露。
ち。の。か。門。ち。る。り。さ。ら

④ 運。い。ろ。く。と。ま。ま。お。お。め。の。る。り。さ。ら。
⑤ 狂。う。ま。女。の。中。し。ら。れ。た。花。の。お。も。れ。や
ま。け。花。こ。そ。ま。く。り。り。さ。れ。本。才

秋山

秋の山をいって画がてら、明らう
こころいしく竹もさくさく

秋。秋。の。け。り。の。ち。の。ま。げ。と。ま。ま。ひ。ぬ。る
峰。の。ま。ま。ん。や。ま。は。か。ま。り。け。も

詞。雲。の。う。る。月。は。し。の。ほ。る。指。さ。び。き
。麻。さ。く。入。や。と。れ。さ。の。夕。日。紅。糸
右。外。林。の。お。も。れ。た。抵。押。ま。し

詩 秋山五字對句

望。中。疑。在。野。山。形。圍。澤。國。
幽。處。欲。生。雲。秋。色。露。人。家。
雲。か。立。テ。出。ソ。ウ。チ。居。凡。家。モ。三。五。元

秋水

清く湛湛とてとどまじし
く冷まいろみどりなり

秋。ろ。く。風。も。器。り。の。水。も。清。き。
山川よりや秋のそららん時房

詩 滕王閣記

落霞與孤鶩齊飛 秋水共長天一色

一。色。ソ。ラ。ト。ヒ。ト。ツ。ノ。イ。ロ。ニ。ミ。エ。ワ。タ。ル
イ。シ。キ。ア。キ。ノ。水。ガ。ス。ミ。ワ。タ。ツ。テ。ハ。テ。レ。モ。ナ。イ

秋水故事

莊子秋水編 秋水時不至
り百川河ノ

西。侯。ノ。渚。雁。ノ。間。ニ。ソ。ギ。牛。馬。并
せ。不。河。伯。欣。然。ト。レ。テ。ヨ。ロ。コ。ビ。流
ニ。順。フ。テ。行。ク。云

秋夕

秋の日は暮るのひをま
秋の夜はまじく長き

秋。秋。の。日。は。暮。る。の。ひ。を。ま
秋。の。夜。は。ま。じ。く。長。き
萩。の。う。り。風。萩。の。ま。さ。つ。ゆ 義。孝

混雑

け邪は日令時令本
なぐらうまらるる

龍田姫

旧都の西より龍
田に移りて

旧都より龍田のまはるる
造化の能を名はけし

秋

秋少くは七日のたす龍田
ゆめはるるを風うら

狂

狂歌ふけのふらり美赤い
とて龍田のいさぎのみ

秋宮

秋宮の宮の宮の宮の宮
宮を宮の宮の宮の宮

宮の宮の宮の宮の宮の宮
宮の宮の宮の宮の宮の宮

宮の宮の宮の宮の宮の宮
宮の宮の宮の宮の宮の宮

律の調

物と律の調の調と十
二月の月の月の月の月

律の調の調の調の調の調
律の調の調の調の調の調

子秋樂

子秋樂の曲の曲の曲の曲
子秋樂の曲の曲の曲の曲

子秋樂の曲の曲の曲の曲
子秋樂の曲の曲の曲の曲

子秋樂の曲の曲の曲の曲
子秋樂の曲の曲の曲の曲

子秋樂の曲の曲の曲の曲
子秋樂の曲の曲の曲の曲

子秋樂の曲の曲の曲の曲
子秋樂の曲の曲の曲の曲

子秋樂の曲の曲の曲の曲
子秋樂の曲の曲の曲の曲

子秋樂の曲の曲の曲の曲
子秋樂の曲の曲の曲の曲

子秋樂の曲の曲の曲の曲
子秋樂の曲の曲の曲の曲

鶉夜

鶉夜の曲の曲の曲の曲
鶉夜の曲の曲の曲の曲

鶉夜の曲の曲の曲の曲
鶉夜の曲の曲の曲の曲

鶉夜の曲の曲の曲の曲
鶉夜の曲の曲の曲の曲

田の庵 田又稲の奥のひりあは
何れを臺りきか進い

秋の庵 秋の庵は
とて田のうらうらふ飯菴を修り

秋の庵 秋の庵は
て田の守らうらふ天智天皇の

秋の庵 秋の庵は
かの庵とよませたまはるる

秋の庵 秋の庵は
てはうら飯菴の庵とて

秋の庵 秋の庵は
とて

小田守 小田守とちりけ
い橋と猪鹿の

小田守 小田守の水
つぬみ小敷をとりきつ

案山子 案山子
田はあふるを押し

案山子 案山子
増都の昔を實信都と云人

案山子 案山子
編を守りてを

案山子 案山子
ぬしうらぬより

案山子 案山子
つよえ

案山子 案山子
都と云

案山子 案山子
都

案山子 案山子
都

案山子 案山子
都

案山子 案山子
都

案山子 案山子
都

案山子 案山子
都

案山子 案山子
都

案山子 案山子
都

碓

碓 搗棒のてしるものなり
まごがひ板の上をゆくはま

けたる挿入を後著るまに

鳴子

秋のたけのほの碓物なる如泉
鳴子と付引て

鳴子

鳴子と付引て
まごがひ板の上をゆくはま

秋

秋のたけのほの碓物なる如泉
ひく人れらまき世のころり

引板

引板と付引て
鳴子と付引て

秋

秋のたけのほの碓物なる如泉
ひく人れらまき世のころり

鳴竿

鳴竿と付引て
鳴子と付引て

風も鳴るころりへ竹のまき
又鳴子と付てなる抄ひ

秋 焚き通して粟かきけり
鳴竿のちてる退へうまひ

車

車のまきを二つ合て作りし日本の
焼糸の始りて水の聖文王

焼糸

馬の尾を焼てまき麻
其香とりて糸

佛

佛焼糸や染しは虫の殻に之種守
け部は三枚よは

艸木

け部は三枚よは
茎本をよは

証

証のまきを二つ合て作りし日本の
焼糸の始りて水の聖文王

生もの乃知葉して色は系
るものこれまきの証なり大和令

別山いこまより地及び畿内の山
よありのちして人々に種る物

あはれ人家の離は極る正木
より杖を系せば秋よよめる

美の正木と遠く
佛の石ぬけて極のころり

秋 海らたのあつと漸し外山より

まはさきのふらいろぼさるんぐれ

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

秋 秋のふら雲よあししの雲さる

詞 ^かびくくときき。まひく落。物
揚の落丸る。村ときき。一村落。
庭。まがき。秋風。かきりる。

俳 ^いまが竹輪。むと。落る。其角
秋風のよごと。かきりる。し。落る。し。

連 ^{れん}秋と入が。物。かびく。落る。み紙
糸薄 ^{いとほしき} 糸細く糸の。とく。長き。に
は。ま。及ぶ。ひ。ひ。ひ。

△ ^いどすきと。日。しき。光と。生れ
俳 ^いどすきと。つ。狼。の。す。み。方。舟
秋 ^{あき} をり。れ。み。さ。ね。り。は。白。落る。

後 ^{のち} 糸と。き。こ。り。こ。り。こ。り。極。道。
あ。ご。り。の。お。の。む。れ。を。は。せん。を。上。天皇

く。ど。ん。△ ^まま。葛。△ ^くど。ど。ど。ど。
△ ^ま葛。と。も。ま。ま。く。秋。風。は

いる。が。る。と。よ。ら。ば。秋。季。と。せ。し。ぬ
る。が。蔓。長。く。糸。を。の。夢。又。付。て

落。く。や。り。う。わ。く。表。あ。さ。く。う。
白。秋。風。は。ひ。る。う。う。表。糸。の

い。ろ。う。が。ま。の。た。れ。が。秋。人。葛。の。糸
の。う。う。と。て。落。て。人。の。眼。の。あ。か。し。め

秋 ^{あき} たま。う。う。ま。り。の。お。の。む。れ。の。葛。も。り
ま。ま。う。う。ま。ま。う。う。ま。ま。う。う。ま。ま。う。う。

う。の。圃。は。葛。う。の。お。の。む。れ。の。葛。も。
ら。う。う。ま。ま。う。う。ま。ま。う。う。ま。ま。う。う。

詞 ^{ことば} う。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。
く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。

狂 ^{きやう} 葛。の。糸。の。い。り。を。言。ひ。て。は。う。う。ま。ま。て
ね。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

連 ^{れん}林。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。
俳 ^いさ。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。

葛。の。糸。の。い。り。を。言。ひ。て。は。う。う。ま。ま。て
ね。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

思 ^{おも}草。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。

つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。
つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。

た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。
た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。

俳 ^い忘。の。い。り。宙。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。た。

葛 異名 蘿艸。赤葛。五爪葛。赤後。烏葛。蔓。膜。...

秋の葛の蔓は人の家の隙間へ極く
秋の葛の蔓は人の家の隙間へ極く
秋の葛の蔓は人の家の隙間へ極く
秋の葛の蔓は人の家の隙間へ極く

芭蕉 異名 甘藷。芭蕉。芭蕉。天
直△やまむせを 九月の

秋の芭蕉の葉は人の家の隙間へ極く
秋の芭蕉の葉は人の家の隙間へ極く
秋の芭蕉の葉は人の家の隙間へ極く
秋の芭蕉の葉は人の家の隙間へ極く

詩 七言對句 詩礎

長葉臨風標綠幹 清更妍

赤心凝日吐丹誠 不眠愁

景天草 一名散花州 異名 天竺
掛壁者 天竹 和名

秋の景天草の葉は人の家の隙間へ極く
秋の景天草の葉は人の家の隙間へ極く
秋の景天草の葉は人の家の隙間へ極く
秋の景天草の葉は人の家の隙間へ極く

草花 花の種の花△百種の花。種乃
花の種の花△百種の花。種乃

秋の草花の葉は人の家の隙間へ極く
秋の草花の葉は人の家の隙間へ極く
秋の草花の葉は人の家の隙間へ極く
秋の草花の葉は人の家の隙間へ極く

秋の草花の葉は人の家の隙間へ極く
秋の草花の葉は人の家の隙間へ極く
秋の草花の葉は人の家の隙間へ極く
秋の草花の葉は人の家の隙間へ極く

雁来紅 雁来紅を産めりし花は北の白

雁来紅 雁来紅を産めりし花は北の白

雁来紅 雁来紅を産めりし花は北の白

詩 草花詞

幽閑不附 蘭芳 草花ハカ

日向江濱 日向江濱

晴日暖開粧麗景 晴日暖開粧麗景

香蒙詞客入 香蒙詞客入

吟郷 吟郷

鶏頭花 鶏頭花

紫冠 紫冠

夜不收 夜不收

珠来紅 珠来紅

先愁 先愁

綠珠宴罷歸金谷 綠珠宴罷歸金谷

夜不收 夜不收

珠来紅 珠来紅

先愁 先愁

綠珠宴罷歸金谷 綠珠宴罷歸金谷

夜不收 夜不收

珠来紅 珠来紅

先愁 先愁

綠珠宴罷歸金谷 綠珠宴罷歸金谷

夜不收 夜不收

珠来紅 珠来紅

先愁 先愁

綠珠宴罷歸金谷 綠珠宴罷歸金谷

夜不收 夜不收

珠来紅 珠来紅

先愁 先愁

綠珠宴罷歸金谷 綠珠宴罷歸金谷

夜不收 夜不收

珠来紅 珠来紅

紅々ベニベニ・絢ベニ・練霞ベニカミ 白シロ・ト赤ベニ・トカカミ・練ベニ・霞カミ。杜カ

丹ニ・雖シ・好コト・不ズ・如ク・它カ。トコ・フイ・ロク・ノウ・ウク

種タネ・元ノ・來リ・不ズ・是レ・花ハ。是ハ・元ノ・ヨリ・ハナ・イホ・ドニ

種タネ・元ノ・來リ・不ズ・是レ・花ハ。是ハ・元ノ・ヨリ・ハナ・イホ・ドニ

白シロ・茅カ。茅カ・香カ・茅カ。茅カ・香カ・茅カ。

妻メ・ハノ・茅カ・をシ・知ル・とシ・はシ・をシ・とシ・とシ

小コ・兒コ・好コト・んテ・遊ユ・ぶル・をシ・小コ・兒コ・食ク

又マ・俗ソク・又マ・阿ア・まマ・根ネ・とシ・又マ・復フク・括クツ・てシ・受ウケ

△高タカ・うウ・やヤ・とシ・ふフ・たタ・くク・まマ・のノ・がガ・り

△高タカ・うウ・やヤ・とシ・ふフ・たタ・くク・まマ・のノ・がガ・り

狂キヤウ・毛モウ・はハ・くク・もモ・まマ・しシ・こコ・りリ・さサ・らラ・こコ・りリ・をシ・り

甘カン・萱セン・剛コウ。甘カン・萱セン・剛コウ。甘カン・萱セン・剛コウ。

もの之秋モノノアキ・則スレバ・家カ・根ネ・とシ・くク・之ノ・中ナカ・にシ

家カ・居イ・所ショ・所ショ・茅カ・屋ヤ・とシ・るル・ふフ・うウ・てシ・諸シヨ・徑キョウ

徑キョウ・うウ・茅カ・のノ・あア・えエ・茅カ・のノ・らラ・がガ・やヤ・うウ

徑キョウ・うウ・茅カ・のノ・あア・えエ・茅カ・のノ・らラ・がガ・やヤ・うウ

きキ・もモ・しシ・こコ・りリ・さサ・らラ・こコ・りリ・をシ・り

のノ・郊コウ・又マ・知ル・△萱セン・膏コウ・△萱セン・物モノ・をシ

植ウエ・也ナリ・何ナニ・ノノ・比ヒ・林リン・也ナリ・もモ・ちチ・るル・まマ・じジ・き

かカ・るル・麻マ・葉エフ・をシ・用ヨウ・由ユ・るル・はハ・しシ・とシ・雨アメ・傘カサ・にシ・出デ・るル

秋アキ・かカ・きキ・うウ・あア・んン・がガ・うウ・がガ・新シン・澤タク・のノ・月ツキ・もモ・あア・ん

○此コノ・歌ウタ・のノ・後ノチ・をシ・知ル・隠カクレ・さサ・ぬヌ・きキ・のノ・園ニ・をシ・く

泳ユキ・せセ・海ウミ・のノ・うウ・ろロ・とシ・ぞシ・けケ・御ミ・制セイ・よヨ・うウ・て

かカ・やヤ・がガ・新シン・澤タク・小コ・遠トウ・きキ・新シン・澤タク・守マモ・りリ・をシ・ぞシ・けケ

備ビ・かカ・やヤ・うウ・てシ・予ヨ・をシ・さサ・じジ・ひヒ・峯ミネ・のノ・松マツ・立タ・甫フ

狂キヤウ・こコ・のノ・あア・はハ・らラ・新シン・澤タク・家カ・とシ・くク・のノ・物モノ

角觝艸

此草の莖を以て角を以て合こ小児のたむしむと云ふ

桐樓葉と云ふけ根を以て割く

よんを名を附抗て力更と云ふ

佛 葉のよむと云ふは草の葉に由

てすしは葉川 葉を依り創と云ふ 許六

犬子艸

又拾尾艸と云ふ名。葉の杖 積出る積出の尾の正又葉の

穂又佛より俗権の葉と云ふ

佛 ころろと響きまじひのころろ 松風

秋 葉のよむと云ふはく穂よと云ふ

秋 葉をくはせれ玉中ぐらん ぬ家

狂 阿は佛てまをれぬりのよのころろ

秋 殿

秋のた穂中清涼殿の 山の方之秋を極らるる名

付られらるる又穂極智穂中名乃御

所之秋よきうは秋の花つらく極

らうとことど附代はよりて響きつら

秋 續千載

後系極

秋のよの花のトキは河溝あり

らうとせの秋のうげぞうのまら

連 秋の房のまらまら穂のうけ昌叱

佛 秋の戸やまらまら穂のうけ浪化

狂 秋の房のまらまら穂のうけ浪化

がさりら秋の女房まらまら 柳里

花壇

花壇。葉のたれ細く。竹の

詩 朗詠集

前載

多見栽花悦目儻

又入々ヲ。先時豫養待閑遊

見ルニ。先時豫養待閑遊

家僮伺

樹春栽 秋草

狂 多見栽花悦目儻

鬼 燈

姑娘葉。非代卷又破葉

カ、子と訓ぜりは八月よりを
りつき秋実とむしとふ

○**佛** 鬼灯と名くこけつやむる西堂

鬼灯や医者感して、心を腫 立志

○**狂** けつさいつろはるき亮あけて

かぐきとさくらんうちく 物手

○**新番椒** 番椒園をまひと園の
まはけ地を南蠻よりき

○**新番椒** と云へば正美長乃以

物てりし之伏見又蘇物とて大き

幸うけし其外種あり

○**佛** 石臺とつら根と唐よりし せ波

徐よりれ杜やふけりてし 蓮二

○**新番椒** 沖目見と蘇物の類と大湖十

○**若烟草** 備前州(備前) 桐思文

○**若烟草** 洗婆姑。還魂菜。莖。

○**布瓜** 本名系瓜。結羅。紡線。

○**布瓜** 蔓科ケリ六七月に実

近世つらまれば若き物を多く回樂

と一食用の瓜門

○**佛** 瓜と名くとも瓜のまはれ哉 由之

○**狂** 世のやまらうとてつらまれのうへも

瓜のいらまれののりまなり 柳尾

○**薬用** 瓜の冷る人系瓜の水をとい

くびぬるべし 一日寒さをさる

○**薑** 新薑(佛) とくくや系り

○**薑** 根りしうき 栗川

○**狂** かき世とらんとせまといりたり

あかりけりも 瓜をばあてし 若叶

○**牛房** 和名 悪臭 一名 牛房

○**芋** 異名 土芋。路崎。家芋

○**芋** 和名 栗路文芋。白見芋

芋の種 類多し 草葉より十に種

を挙げがねれりて 團々水出

うよりて 形も異なり 團石の方正

まよりて 俗名の多しあるを

○**顔の芋** 一名 紫芋。既芋とも

○**顔の芋** 浴の赤青村九条村

のりの天かみまゝ又芋の尻大目し
て三竹斗の枓あり茎と合ふま
みいもど又いぐさいづみ

① 狂 杖束は毎夜うんでうくあち
かふも他さうへいせちうさう 自見

幕積 山幕。根條徳里
山薬 ○種敷多し

△ 山薬とて野ふまといひと
山茶ともいふ。里に栽るもの

△ つくねいも又字ま芋とも云也
別名佛堂若者とも芋の形をい

らげとて丸く是と名づの圃を
い麻芋とも又折芋根柿のど

長芋家山薬なり 諸薬の形ら
同とて甚からざる。若者若

時と風水時候ふのしとて穀と
るの古代なり 俗人ともいふなり

② 柳 堰をいふが垣根や山いも葉二
能はせやゆし 桐馬の内裏は昔云

零餘子 薯蕷の蔓よせとれ
食用と成方なり

甘藷 元祿のとき及アウキウ
より産摩るなり

果 このとき 柿。栗。桃。栗。これと
△ 又果といふ又芝の果と蔬

と之は外果多く秋実のなる
③ 秋 彩物秋敷

△ 夏木多く佛のうねとまづい
この糸となくんともたのし

謙 明る
いふるもちけいひのよそひ

④ 柿 赤実果。萎合。霜長者
乳卵。麻心。朱果

⑤ 秋 教本 後れ
かしてこのもをらんみだんが

せはうとくきとけしうなり

⑥ 通 益修は後身らせし柿の本 宗云

柿トモ 柿トモの地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ
柿トモの本ノやヤとトくク自ジ穢ケガレのノ親オヤ仁ニ也ヤ崇タカ崇タカ

詩 七字對句

詩 礎

垂シ枝エ星セイ實ジツ累累レイレイ々々熟ジュク

千チ顆カ蜜ミツ

帯オビ葉エフ霜シユウ皮ヒ顆カ顆カ乾カン

一イチ林リン霜シユウ

葉エフのノ多タ柿トモ粉コノノ皮ヒカ

ハヤシハイニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

柿トモのノ捲マキ乳ニ 柿トモのノ捲マキ乳ニ

秋 著聞集

春先法師

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

霜シユウ柿トモのノ地チ多タくク穢ケガレ穢ケガレるル多タ考コウ

柿餅 柿と押ろし菓の粉を和して蒸す餅

餅 餅を和して世と味くくしやと人利合

梨子 梨の果。葉宗。玉乳。蜜又。

種類 水まじり。山梨。蜜又。

梨 本梨。近江梨。松尾梨。空梨。生浦梨。大梨。津野梨。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

梨 梨の葉。葉宗。玉乳。蜜又。

① 篠田の稲を刈りてては正香
扱ふて月を度稲の穂ひる 其香花

② 稲舟 川は長くよめり
いさふはあつたこの月さうり

③ け秋さうりて舞うていふれどもさ
いさふをいふふのいふはあつ

④ ぬらふちや波とのせたる波の上ま田
ぬらふちや波とのせたる波の上ま田

⑤ 稲刈 秋田州のまぬ 稲刈や
同をいふての穂の穂可考

⑥ 山更の秋さうり刈ることさうり
お田の穂のませ さいり 後成

⑦ 落穂 老翁は稲はまうり
て落すと寡婦をさるる

⑧ ひらふ春さうりといふまき
作務物信 女とわいのんまは

⑨ うらまびて落がいららるるまは
我も回つてうらまは

⑩ 稲子 後臺の稲子窓
いづれか 其角

⑪ 秋さうりおのちての稲を刈り
とれまはまはまはまはまは

⑫ 稲庭 貞徳の稲のま
る面平くにしてしるる

⑬ 又稲をまはる後遺てまはる
秋さうりまはるまはるまはる

⑭ 秋さうりまはるまはるまはる
秋さうりまはるまはるまはる

⑮ 喬杆 稲城まはるまはる
けてわはるまはる

⑯ 秋の田まはるまはるまはる
民のまはるまはるまはる

⑰ 稲扱 稲の穂をまはる具
近世と扱著とて竹二本

⑱ のる小稲のやまはるまはる
是と扱著のまはるまはる

⑲ 秋さうりまはるまはるまはる
秋さうりまはるまはるまはる

⑳ 秋さうりまはるまはるまはる
秋さうりまはるまはるまはる

㉑ 秋さうりまはるまはるまはる
秋さうりまはるまはるまはる

㉒ 秋さうりまはるまはるまはる
秋さうりまはるまはるまはる

右の籜の籜こき出てうり寡婦業
籜こき出て籜信号て寡婦業と云ふ

新米 △江戸く米△喜米。八月
の喜米に比し方書おれ丸

籜の熟とつら遅速の相成三秋は後る
籜の熟じや未摘実のつら未秋矣

綿糸 △本綿糸。綿の糸なり
支綿二種あり樹綿の

本も大きく丸赤く甚だつら
パンヤとも月草とも中んりなり

今阿のり花綿なり
籜よりや籜の目籜も寸言呂林

狂 阿まらうて筆を阿のまのりつ海
ぬきぬ後浪のまらたま由蕪

桃吹 籜の美え小き桃の
はつと刻中うり籜と吹出

秋生類 ころ部ふは三秋
後ら生類を歩け

籜 △籜 △籜既 △籜笛 △籜
恒 △毒と籜 △籜の奴

和の △和名籜 △籜名 △うせき
異名 △とがら。とがら 次、まら

異名 作尾。花山名士。茨夜郎。ま
名 親女。角仙。神馬。楓鶴。

牡籜の角あり 北籜の角あり
牡と籜ともいふ。性多淫にして

籜より籜の北と云ふ 籜啼て
北と云ふ 秋の籜を志き入る 舎出

△籜 籜とらふ籜の後ごりりの
はふり籜の皮とてもうとまきもの

籜の籜はくり吹が籜のまふ
似る 籜多く出て将人の居り

阿より一近くよるを押し 完ふ入
籜の籜よりけ免れり 秋の業なり

△籜 籜の田畑へ籜瓜をせまらき
みりりうけたる恒

秋 古今ともなる
とがら籜く杖杖籜系朝さらそ

多む多人をいりりまら
秘苑 とも

秋 垣根はは徳の事なれても
までの田長まのびよつ 後れ

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

秋の徳は徳の事なれても
徳の徳は徳の事なれても

系連に多く住たり秋よのまゝ
 涼州神うよと合せくこれ心懐の
 名不ろくいつくもささく荒
 世よあつて秋むらぐりひるに
 夢に伏し窟と其財渡うり
 横州をえんはたに居るをを
 定めん地いささうて安んじ
 成る聖人熟居じきとらう其子出
 怒ハキ、コのか如△斤熟の
 夫婦をりて居るを△△
 熟い鷹たかようけ合さの燕雀出
 △熟の底△△△れう不とと
 草むしをのふり秋よづづの
 底い何れまたりともより△熟
 熟いいを飼養ののなり
 △熟細いづづをを細かり
 山田守るきそれせや尾けが
 何せつて熟をを人後乳

詞尾花くき。をのがりど。神
 の底。わけづづ。里のうづ
 うさうやう下。きりのまがれは
 。をのが底をろく。神尾。また
 野。病の枕。はゆとむと。草
 うき。くろつてひかり。
 細うつ。そ略を仄やまの浦蓮二
 西条のやと見よる付や唱うう全
 狂疾まより准とむらうづきや
 いまま草まよううつつかかり真老
 鱸うなぎ 異 肥魚。紅文魚。鱸
 名 鱸魚。松江魚。
 川よも海よもありの大小よりそ
 名を異えとる之小と世いことの人
 秋 秋風あきかぜきりきつる舟ふねきり
 うのこてては名跡をままくく西多
 阿あのの最さいののううととききつつる
 あまあままややんん離りれれをを人に死
 秋の疾乃交舟の浦よ再出り
 月よやあまあれれつつらんん

狂 けいごう 鱸料理のりめしき
何れか見たり他つてさうり九利

事 故 鱸膾 南郡記曰吳人階
煬帝ニ獻ス帝曰

金 薩ノ玉膾東
南ノ佳味ナリト

秋風起 晋書曰張翰字ハ季
鷹吳ノ人ナリ浴ニ入テ

大司馬東曹ノ掾トナル秋風ノ起
ヲ見テ忽我故郷湖中ノ蓴菜

ノ羹鱸魚ノ膾ヲ思ヒ出シテ曰人ハ
唯ニロサシニ適スルコソ貴メ何ソ

此數十里ニアリテ身ノ名爵ヲ
要セシヤトスニヤカニ宦ヲ棄テ

吳中ニ皎レリコノ意
ヲ和歌ニヨシテ

秋 秋風ノ鱸のたますさひ出く
けいごう 人の心らこそとれ後れ

名 異 吹沙。鮑魚。沙鰯。
沙魚。阿浪魚。彈塗

魚。川末海らうたるにあり
く水産ノ鱸也

鮑 八月の末いよく大く
かろを結て物人海ニ

をた川ニ出ると母ひくし只
目の出をようしして夜中より

舟と出たよくけいごう 鮑中
浪花川はむらたか

鮑 鮑や水村山廓酒樓風嵐雪
をせつりや訓藻の種も言れ言水

狂 若のきんたの鮑同とをせはうぐ
舟はたよく半日ぶく 茶里

江 鮑 鮑の小さくいのあり
△小瀬△洲

秋 山家集 西行
うづつははかの水はたるとま

えぶああつはあ合のさ
鮑 うちのけりちる白たは鮑外去者

鮑 鮑は九万疋。鮑はくらくらにじ
鮑はくらくらに海をく

毛を来る臍と白して其を瓜然引
とのふされども瓶中此物と云と云

鱈イサナ △ハヨ一列(南)御紫又
紫ムラサキもつふたり

あくの海邊までけし後小いとし
のちろくもゆびし

佛小いまーや一日遊る後乃門 香子
玉うさろ海まが表やいーひき 梅雨

鱈雲 秋西の雲雲う 赤き
そのふけとれ鱈まー

佛山いつ七七月徒まー云 未示
凡其まてむさかりけり鱈くも馬成

狂々どれ乃秋をさあていー云
いけり物さうきんあれも松下

佛葉耳ハエミミあふいーの秋と云
やまてて飲つふまて耳の根ふぬる

鱈藻 秋のみれまーう 藻らけ
水勢ふれきて落まる鱈と

佛去りて秋ぬらうまらう 紫雲金
今をうらてるまらう

三秋ノ部終

俳諧作意早傳受 全一冊

俳不在能得俳名ハハナの妙端とみまて
集り止い影と多く記し付句の秋句
面白と教くのと云まも新表秋ホ
名人の句と加へて守る外前句の心
乃切字は法式と俳人伝ふまらう
数多記と終し紅梅白梅老梅八潮
梅も外梅の箋句俳諧教百句と出
一在分る俳の心

俳林名句註解 全五冊

俳諧古今の名句と集め秀く
狂舞とる一法と加へた古たゆとの
と雀一各句教百首と出 俳林の
画漢文面をいらく出と

七夕由来之記 全一冊

七夕天の川の事と考くあらしと云と
かく他志の伝うと守

文化三丙寅歳發行

浪花書舗 心齋橋南江四丁目
吉文字屋市丸衛門

